



Data

監督・脚本: ペドロ・アルモドバル
出演: アントニオ・バンデラス/ア
シエル・エチェアンディア/
レオナルド・スパーリャ/
ノラ・ナバス/フリエタ・セ
ラーノ/ペネロペ・クルス

■ショートコメント■

◆『ペイン・アンド・グローリー』とは「痛みと光栄」。本作の主人公である初老の映画監督サルバドール・マロ（アントニオ・バンデラス）は現在、背中（脊髄）の痛みに悩まされているが、本来の「痛み」は、その痛みを含む心の痛みのすべてらしい。彼は今、引退同然の生活を送っていたが、子供時代や恋人のことなど、自身の過去を回想すれば、それは栄光に溢れたものばかり。とりわけ、映画監督としての栄光の数々と、子供時代の愛する母親ジャシнта・マロ（ペネロペ・クルス）との思い出は・・・？

このサルバドールは、本作を監督したペドロ・アルモドバル監督自身を反映しているらしい。そして、本作でサルバドール役を演じたスペインの俳優アントニオ・バンデラスは、カンヌ国際映画祭で主演男優賞を受賞し、第92回アカデミー賞で主演男優賞にノミネートされている。そんな本作は新聞紙評では概ね絶賛されているから、こりゃ必見！

◆ペドロ・アルモドバル監督は今ざっと70歳だから、私と同年代。したがって、その歳になって、過去の痛みと栄光を回想する気持ちはよくわかる。そのメインになるのは、プライベートな面では母親のことらしい。それは、回想シーンとしてかなりのボリュームが割り当てられている子供時代の彼と母親との姿を見れば、なるほど、とよくわかる。そして、それは「カラスの勝手」だが、面白いのは、仕事の面では3年前の彼のある作品の主演男優だったアルベルト（アシエル・エチェアンディア）と再会し、アルベルトが再度サルバドール作品への出演を切望する中、彼からヒロインの味を教えられることによって、再び仕事への意欲をかき立てられていくことだ。サルバドールの心はなぜそんな風に向かっていくの？それを、サルバドールの分身であるペドロ・アルモドバル監督自身が自己の体験を踏まえて（？）脚本を書き、スクリーン上で演出しているから、それなりの説得力があるのは当然だ。しかし、それも彼の個人的な記憶の中での葛藤だから、ハッキリ言っ

て私にはどうでもいいこと。さらに、かつてマドリッドで出会い、愛し合った男（レオナルド・スバラリーヤ）と再会し、10年ぶりに男同士でキスを交わすシークエンスを観ていると、「どうでもいいから、好きなように」とつい突き放してしまう気持ちに・・・。

◆「怪傑ゾロ」を主人公にした映画は、アラン・ドロンの1人2役で兄弟役を演じた『アラン・ドロンのゾロ』（75年）をはじめたくさんあるが、『マスク・オブ・ゾロ』（98年）に主演していたのが、若かりし日のアントニオ・バンデラス。その俳優が初老の映画監督サルバドル役を演じているのだから、時間が経つのは早いものだ。私だって弁護士として独立したのは1979年でちょうど30歳の時。自社ビルである今の事務所に移ったのが、50歳過ぎ。そして、今は71歳だから、アントニオ・バンデラスだって、『マスク・オブ・ゾロ』から本作まで時が流れる中で大きく変わったのは当然だ。

しかして、時代の流れに伴う私の変化や俳優アントニオ・バンデラスの変化が当然なら、ペドロ・アルモドバル監督その人の変化も当然。そんな監督の「ペイン・アンド・グローリー」を2時間にわたってスクリーン上にタプブリ描かれても、私がそれにあまり興味を抱けなかったのは仕方ない。

その結果、本作は丁寧に演出されたい映画だったが、基本的に興味なしとして、ショートコメントで。

2020（令和2）年6月23日記